

日吉台地下壕保存の会

会 報

第55号

発行 日吉台地下壕保存の会
編集 事務局(年会費)一口千円で、一口以上
郵便振込口座番号00250-2-74921
(加入者名)日吉台地下壕保存の会会計のお問い合わせ： 白鶴 邦子 港北区下田町1-4-14 045-563-3760
その他のお問い合わせ：喜田美登里 港北区下田町2-1-33 045-562-0443

目 次

第8回横浜・川崎 平和のための戦争展 写真	1
同上 お礼とご報告	3
戦争体験を次世代に継承するために	2～3
戦争遺跡保存ネットワーク 高知県南国市大会に参加して	4～7
連載日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話 33	8～9
消えゆく戦争の遺跡	10
横浜市長への要請書	11
運営委員会報告	12

ページ

戦争体験を次世代に継承するため の「横浜・川崎平和のための戦争展」報告

運営委員 亀岡 敦子

記録的な猛暑と言われたこの夏は敗戦から五五年目にあたりました。例年この時期になるとマスコミ各社は戦争特集をくむのですが、今年は「戦争体験の風化」と「戦争の次の世代への継承」という論点が目につきました。私たちが、慶大日吉キャンパスの地下に残る海軍の施設を保存するための運動を続けている理由もこの点にあります。

「モノ（戦争遺跡）」は決して「ヒト（体験者）」にかわることはできないし、想いをどの程度伝えることができるのかは、はなはだ疑問わしいのです。しかし、小さな石碑

が一つ建っているだけでも、

過去のできごとに想いをはせることができるのが人間です。ヒトによる直接の継承がいつかは不可能になる以上は、戦争遺跡を残し、正確に調査研究することによって、情緒にながされることのない、何かを、そのモノに語らせることが可能だと思われれます。

今年、八回目を迎えた「戦争展」の主な内容と感想を記して報告とさせていただきます。

一、展示

日吉台・蟹ヶ谷通信隊地下壕、登戸研究所の写真

上原良司の「所感」原稿とノートと写真（白百合とウイスキーを供えてくださった女性あり）

二、若者の発表

①「沖繩戦をみつめて」山梨学院大・教育研究会 古屋日咲子・桂谷幸秀・塩原健吾

*沖繩の皇民教育を中心とし

た研究発表

②「書評『あゝ祖国よ恋人よ』を読んで」上原良司の生き方と現代の戦争に対する若者の態度（花ゼミ（慶大と中大の学生の勉強会） 藤田和弘

*良司の書残した日記や遺書を手がかりに自分たちの生き方にまで論議を深めた発表

③「日中の若者が戦争を学ぶために」中国でのアンケート結果から（明大大学院生 齋藤一晴

*中国での自らの調査研究の成果を発表

★完全に戦争を知らない世代の三組の若者の発表は、研究内容も意識も大変に真面目で高度なものばかりでした。戦争を知る世代から「こんなに嬉しく心強いことはありません」との感想を頂きました。

三、講演

①「太平洋戦争下の慶応義塾」白井厚帝京平成大教授

*戦争下の教員や学生の姿が具体的に語られた。

②「戦争の世紀としての二〇世紀」松村高夫慶大教授

*七三一部隊研究の第一人者の語る戦争の実相に聴衆は聞入った。

★両先生の講演は聴く者全てを魅了し、深い感銘をよびおこした。延べ三〇〇名余の来場者があり、聴衆の熱意と講演者の熱弁で、クローラーも殆ど役に立たない有様でした。

四、日吉キャンパス・ピースウォーク 説明…新井揆博氏

★地上にも幾つもの戦争の語り部が残されています。炎天下八〇名余の人達が熱心に歩き、説明に耳を傾けました。

戦争を知ること、平和を築く第一歩であると確認できたと思われれます。

今年、戦争展は今までは一味違っていました。会場が



第8回横浜・川崎平和のための戦争展

～お礼とご報告～

戦争遺跡そのものである日吉キャンパスであったことです。関係者のご理解とご協力に、改めて感謝いたします。

何事も五回は続けてみるにとだ。その上で一〇回続かないと本物にはならない、と聞いたことがあります。来年は九回目、そして「戦争遺跡保存全国ネットワーク」全国大会も兼ねて、八月四日・五日に、川崎市平和館を主会場に開催する予定です。日吉キャンパスでも何か企画できないものでしょうか。白井先生が「戦跡保存全国シンポジウム」神奈川県川崎市大会実行委員会代表をつとめてくださることにになりました。有意義で感

性豊かな大会にしたいものです。

7月22・23日に開催の標記展では、厳しい暑さにもかかわらず、大勢の皆様にご来場いただき、成功裡に終えることができました。ひとえに皆様方のお力添えの賜物と心よりお礼申し上げます。

慶大日吉キャンパス藤山記念館で開催できたことは、何より嬉しいことでした。これからも21世紀へ向け、新たな気持で真の平和を願い、戦跡保存の実現を強く訴えていきたいと思ひます。今後とも、ご支援、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

2000・9・26

代表 白井 厚

下記の通り会計報告いたします。

収入の部		支出の部		単位円	
前年度繰越	39,191	運営費	83,572	会議等	
賛助金	247,000	事務費	28,128	用紙等	
カンパ	23,000	印刷費	23,922	チラシ・資料等	
資料・参加費	45,000	事務通信費	26,316	書籍等・発送等	
計	354,191	交通費	30,180	借用・返済等	
		謝礼	55,000	講演等	
		計	247,118		

354,191-247,118=107,073 次年度繰越金

会計担当 白鶴 邦子

4. 交流会

2日目の夜に全国の保存運動に取り組む人たちの懇談会が行われました。土佐の地酒と高知の女の先生方による踊り「よさこい音頭」で盛り上がり、楽しいひとときを過ごしました。

5. 閉会集会

分科会のまとめと大会アピールの採択が行われました。また来年度の開催地として2001年8月4日5日川崎平和館を中心とする神奈川で行われることが発表され、慶応大学名誉教授白井厚先生が「たくさんの方々ににぎにぎしくいらして欲しい」と挨拶されました。

6. 会員総会

活動報告、会計報告、規約の確認、新しい運営委員の選出などがありました。文化庁交渉を申し入れているがまだ実現していない、地域ごとに行政の「詳細調査」を把握して欲しい、ブックレット「戦争遺跡は語る」の普及に努めて欲しいなどの報告要請があり、組織、財政では現在団体26、個人113であるが、各団体では構成員の10パーセントを目標に会員の拡大に取り組んで欲しいとのことでした。また運営委員を選出している団体では団体分担金（会費4千円×3口）の拠出を要請するとのことでした。またインターネット、ホームページの利用によるネットワークの緊密化のための研究・検討を図っていくとのこと。今年度神奈川から三名（渡辺健二；登戸研究所、新井揆博；蟹が谷地下壕、谷藤基夫；日吉台）が運営委員として活動いたします。

7. フィールド・ワークⅡ

三つのコースに分かれて見学しました。私は高知城の西側にある平和資料館「草の家」見学。植木枝盛の生家、坂本龍馬生誕の地、婦人参政権発祥の地など見学しました。土佐は自由民権運動発祥の地とか、明治憲法発布以前の地方選挙で戸主として選挙権を行使した女性がいたと聞いて驚きました。草の家は民間の平和資料館ですが、地域の中で活動し、更にホームページで世界に発信し、国際部が資料の英語版も発行していました。「神の国」発言などで不思議な国と思われるらしい日本から平和の訴えがアジアをはじめ世界の人々に伝えられることは素晴らしいことだと思いました。ブックレットが何冊も発行されていて活動の幅と深さを感じられました。

8. 所感

自由民権運動発祥の地、高知の人たちはそのことを大変誇りにしているようで高知空港では「自由は土佐の山間から」と書かれたTシャツを着て歓迎してくれました。フィールドワークでもホテルのバスだけでなく南国市のバスも配車され、市をあげての取り組みを感じられました。来年の大会に向けてどのくらいの準備が必要か注意して見ていましたが、受付に資料だけでなく案内の幟、参加者にリボン、雨が途中降ってきましたので傘の無い人にレインコートの配布とかなりの準備と人手、そして気配りが感じられました。販売された冊子「掩体物語」の編集、近くの小学校の体育館で行われた「戦争と平和展」の準備も多く時間と人手がかかっていると思われます。

南国市長、教育長も開会集会には参加し、挨拶がありましたが、その連絡なども大変だったと思います。マスコミもNHK、朝日新聞や地元の高知新聞など積極的な報道がなされ、参加者も京都大会と同じかあるいはそれ以上だったように思われます。

夜の交流会も「よさこい音頭」のアトラクションなど地元色の強いものでした。交流会もかなりの気配りの上でされていたのだろうと思います。

来年の大会は高知よりずっと交通の便の良い首都圏であることなど思うと、より多くの参加者が見込まれます。これまでの「横浜・川崎平和のための戦争展」を少し背伸びしてやれば全国大会の実施は可能ではないかと思っていたのですが、それに要する人手、気配り、配慮など思うといささか心細いものがあります。全国から参加された方々に、さすがと思われなくても、来て良かったと思われるような大会にするためには大変な準備と人手がいるのだろうと率直に思いました。

2001年8月4日5日の全国大会まで1年を切った今、9月20日に第1回の準備会が行われますが、今後保存の会会員各位の一層のご援助をお願いいたします。

戦争遺跡保存ネットワーク 第4回全国シンポジウム高知県南国市大会に参加して

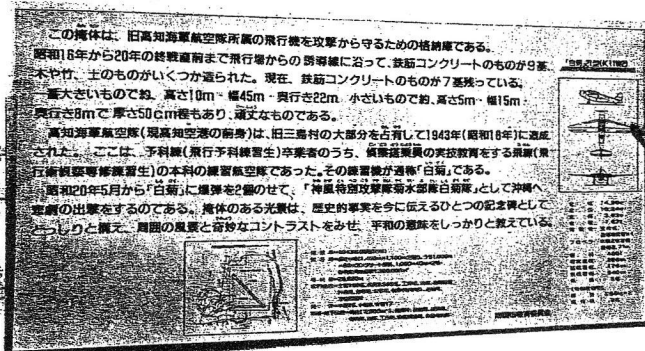
— 来年は川崎平和館を中心として大会が行われます —

運営委員 谷藤基夫

去る8月18、19、20日の三日にわたり高知県南国市において標記の大会が行われました。保存の会から5名の会員が参加しましたが、全国から210名あまりの参加者があり、全国の戦争遺跡の保存について熱心な討議が行われ、成功裏に終了しましたのでその状況についてご報告いたします。

1. フィールド・ワークⅠ(一日目)

高知空港周辺に点在するトーチカ、戦闘機を格納した掩体壕、撃墜されたグラマンのエンジン、プロペラ、現地主催「戦争と平和」展を見学しました。掩体壕には南国市により説明板がきちんと立てられていました。青々と広がる太平洋、米が年二回とれる二期作の地、緑豊かな南国の地にも無骨なコンクリートの固まり、掩体壕が点在し、中には機銃の弾痕もあって戦争の爪痕が未だに残されていました。



2. シンポジウム(二日目)

開会集会には南国市長、教育長も歓迎の挨拶をされました。

基調報告では松代大本営保存の会から大日向悦夫氏が「戦争遺跡保存運動の到達点と課題」と題して報告されました。全国で行政による戦争遺跡の文化財指定が10件(国1、市4、町1、村2、登録2)と少しずつ進みつつあり、全国で地域ごとの戦争遺跡ガイドブックが発刊されつつあるなど運動の前進を示す光の部分と遺跡の取り壊しが行われ、平和博物館の内容改竄などが行われている陰の部分と両面から話され、遺跡保存運動は平和博物館の建設運動と一体として位置づけられるべきだとされました。

シンポジウムでは「21世紀に伝えるべきアジア太平洋戦争の真実—平和資料館、平和記念館の真実—」と題して大阪、堺、沖縄、東京、川崎、高知の市民団体の代表が各地の保存運動、平和博物館運動の状況を報告しました。東京や大阪、沖縄では公立の平和博物館が展示の内容について様々な干渉を受けている実態が報告され、堺や高知の民間の平和資料館では地域に根ざした活動の重要性が強調されました。川崎の市民運動によって生まれた川崎平和館について保存の会の会員で蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会の新井博さんが報告されました。

3. 分科会(二、三日目)

第一分科会「保存運動の現状と課題」に11人の報告があり、「日吉台地下壕保存運動の現状と課題Ⅱ」と題して保存の会から谷藤基夫が昨年からの会の活動について発表しました。

第二分科会「次世代への継承」では9人の報告があり「平和のための戦争展『私の町から戦争が見える』とピースウォーク」と題して保存の会の喜田美登里さんが横浜、川崎平和のための戦争展の実践について報告しました。

20人の報告では北海道から沖縄まで全国各地から報告があり、昨年の京都大会よりさらに運動の広がりが感じられました。また内容も歴史学、考古学からの発表だけではなく今年は建築士の方の建築学の立場からの調査発表(静岡遠江射場)もあり、学際的アプローチによる戦争遺跡の学術的調査の必要性も強調されました。

は「沖縄県平和祈念資料館の展示改ざん問題」、川崎からは「川崎市の平和館と戦跡保存運動」、高知からは「地域に根ざす民立平和資料館・草の家」と題して報告された。

沖縄の「平和祈念資料館の展示改ざん問題」は、私たちに大きな教訓を与えた。沖縄では、県民が沖縄復帰前後から戦時体験記録を住民の視点で科学的に記録して、後世に残す作業、そして学習の場としての「資料館づくり」を進めてきた。今では全国から22万の高校生が平和学習に訪れているという。

ところが平和祈念資料館では、ここにて「日本兵の銃をとった」展示改ざんが暴露され、調べるうちに百数十項目にわたる展示改ざんが明らかになった。直ちに住民から琉球タイムス・琉球新報に400を超える投稿が寄せられた。大半が沖縄戦の真実を伝えよというものであった。真実を伝えよ・それを学ぶ場「平和祈念資料館」を守れという沖縄県民の大きな声の中に、行政は遂に展示改ざんを取り止めざるを得なくなった。そして撤回を表明した。だが謝罪も無い、誰が改ざんを命じたのかその氏名すら明らかにされていない。この展示改ざん問題は、全国にも共通している問題で、それが沖縄に顕著にあらわれたものといえるだろう。

沖縄では、戦争の悲劇の立場に立ちながら、資料館に真実を伝える中身を更に構築していく。沖縄の住民は、天皇の軍隊、自国の軍隊は決して住民の命を守るものでないことを沖縄戦から学んでいる。これからもアジアの人たちが見て納得のいく資料館展示づくりを進めたいと報告した。

午後から分科会に入った。第1分科会は、「保存運動の現状と課題」というテーマで12本のレポートがあった。

今年岐阜瑞浪の会が結成され、新たに地下壕の遺跡調査報告がされたこと。各地でも調査の協力体制が進んでいるなどさまざまな分野から新しい報告がなされた。そして建築史的な視点で学術的報告もあった。地元高知から埋蔵文化の考古学の立場から小さな市町村でも全体の遺跡調査のなかに戦争遺跡の視点を持って発掘調査を進める必要を指摘した報告もあった。沖縄では全国に先駆けて戦争遺跡の詳細分布調査が進んでいる。建築分野の団体にも呼びかけ、学際的な戦争遺跡保存研究の必要性も論議された。

皇民化教育のシンボルとして存在した奉安殿や忠魂碑をどう意味付けて残して行くのか、山梨ネットを中心とした研究に学びながら全国的にも深めることが話された。

第2分科会では、「次世代への継承」というテーマで討論された。若者にどう継承して行くか、そのためには徹底した調査をすること、それを記録にきちんと残すこと、普及するための学習・教育・方法など含めて討議された。ガイドを養成する点でまだ遅れているので組織的に追求する必要が話された。環境問題も討論になった。

分科会終了後、閉会集会がもたれ、次回の第5回大会を神奈川県川崎市で開催することを確認。大会アピール「アジア太平洋戦争の真実を継承し、平和な21世紀を実現するため、戦争遺跡の史跡・文化財指定を進めましょう」を採択して閉会した。午後から、地域見学会があり4時ごろ散会した。

(以上)

第4回「戦争遺跡保存全国シンポジウム」南国市大会に参加して

運営委員 新井 揆 博

戦争の真実を掘り起こし21世紀に伝え反戦平和の活動に生かすにはどうすればよいのか。第四回「戦争遺跡保存全国シンポジウム」は、全国から210名（延べ360名）の参加で、8月18日から20日まで高知県南国市のホテルホリディ・イン高知を会場にしておこなわれた。

第1日目は、午後から高知空港周辺に残る旧三島尋常小学校跡の碑、トーチカ、撃墜された米軍戦闘機のプロペラとエンジン、海軍高知航空隊の鎮魂碑、開拓記念碑、七基の掩体壕（戦闘機を中心とした待避壕）、大湊小学校で「戦争と平和展」、そして陣山送信所などの見学会をもった。

特に掩体壕については、南国市が説明板を設置。市民の提言により、田村遺跡とあわせた「歴史公園」の一環として保存する構想が進められているという。

第2日目は、9時30分から開会集会、全体シンポジウム、分科会が行われた。開会にあたり、十菱駿武代表・浜田利重現地実行委員長挨拶のあと、南国市長浜田純氏から歓迎の挨拶があった。

基調報告は、「戦争遺跡保存運動の到達点と課題」と題して提起された。

はじめに、この一年間の戦争遺跡保存の活動に光と影が見られたことを紹介。市民運動が全国的な広がりを見せ戦跡ガイドブックが相次いで出版されたり、文化財保護審議会が登録有形文化財に140件を登録するよう答申したこと、その中に京都市人文科学研究所附属漢字情報研究センターや近鉄澁川橋梁など戦争にも関係する遺跡が含まれていたことは進んだ面であったこと。一方では、影の面として戦争遺跡の破壊が引続き行われていることで、特にその中でも昨年京都大会で私たちが見学した京都市伏見区陸軍十六師団師団長官舎の取り壊しがあり、地下壕崩落事故がいくつかあったことだ。私たちは、このような今日の状況からして戦跡保存が重要な課題であることを改めて認識した。

そして基調報告では、戦争遺跡保存運動の課題を6点にまとめて提起された。①戦争遺跡の全国的な分布調査と個別遺跡の調査・研究を前進させる課題。②戦争遺跡の文化財指定・登録の実現。③戦争遺跡の保存・公開（活用）運動の展開。④保存活用方法の検討。⑤平和博物館建設運動との連携。⑥ネットワークの全国的な拡大と財政基盤の確立をはかることである。

全体シンポジウムは「21世紀に伝えるべきアジア太平洋戦争の真実—平和資料館・平和祈念館をめぐる諸問題—」をテーマに、6人のパネラーによって討論された。討論のねらいは、平和博物館が出来て多くの成果がある中でさまざまな攻撃も見られる。それに対して、どう対応しこれからの発展方向を模索するかにあった。

大阪からは「『ピースおおさか』の現状と課題」、堺市からは「戦争の歴史を伝える拠点づくり」、東京からは「東京都平和祈念館（仮称）建設をめぐる問題について」、沖縄から

連載

日吉台地下壕

当時の関係者の

思い出話 33

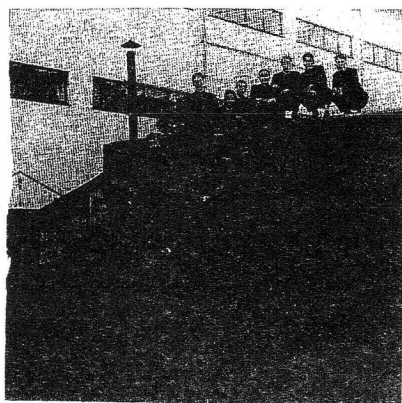
海軍主計科士官の回想 2

御厨 文雄

連日連夜の空襲の最中、昭和二〇年三月から五月にかけて、昼夜三交替制による突貫工事を強行し、遂に五月中旬日吉台に地下築城施設が完成した。

五月二五日の東京大空襲で、海軍省、軍令部など海軍中枢部が焼失する直前に、その大部分の重要書類の地下移管を完了し、爾後の海軍作戦行動にいささかなりとも貢献できたことは、終生忘れることのできない強い思い出となっている。

そのためには、直接築城工



昭和34年 当時の風呂の裏でのスナップ

（「慶大日吉寮開設五十周年記念誌」より。

地下壕への百段余りの階段があつた所と思われる）

事を担当した技術科士官、技術兵、工作兵の苦労とは別に、主計長としての私には、彼等のエネルギー源の補給および資材調達の困苦が、常につきまとつたのである。

地下施設のコンクリート打ち用のセメント調達が間に合わなくなつて、九州へ飛んだり、北陸の伏木港に飛んだり、

全国各地を飛びまわつての資材調達等々・・・

そして遂にセメント不足を補うための大谷石代用案による計画変更にしたがい、宇都宮等の原産地からの大谷石収集に全力を投じたりした。

最後には、ついにこの大谷石も不足勝ちとなり、せっぱ詰まつて、田園調布等々の東京都内高級住宅街の焼跡から何万本かの大谷石を収集、購入した。

この一帯の住宅地の居住者は、戦災後、ほとんどの方が地方に疎開して不在のために、緊急対策として当時の田園調布町町会長であつた渋沢秀雄氏（元東宝会長、戦後随筆家）にお立ち合い頂いて、各戸からそれぞれ、大谷石（門、塀用）を収集買ひ上げて、代金を一括してお支払いした。

当時、若年の私ごとき者の

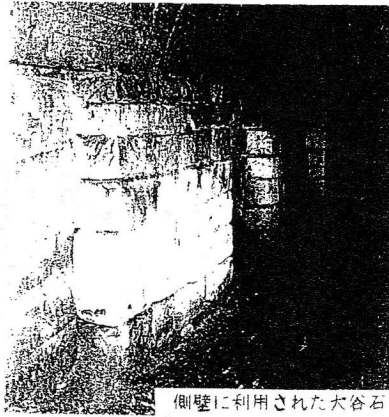
要請を、渋沢さんは快くお引き受け下さり、ご協力下さったこと等、強烈な思い出として三七年後の今日もなお残っている。

終戦後、疎開先から帰京した居住者の二、三人の方から海軍が焼け跡の自宅から無断で大谷石を持ち去つたと訴えられて、私は海軍省に呼び出されたことがあつた。しかし、町会長としての渋沢さんとの一括委任状、品代金領収証、集石承諾証等の書類があつたので、お話し合いの上で円満解決した・・・という後日談もあつた。

当時は、本土決戦直前の戦況下であり、緊急作戦として、無断撤去徴集もまた止むなし、という空気が施設本部内にも、また設営隊内にも一部にあるにはあつたが、私は海軍主計科士官として、当然の処置と

して一括購入方式を採用したのであった。

しかしながら、疎開先から帰京されたあの一帯の方々は、その後のインフレーション時代と相俟って、大変な迷惑をおかけした次第であり、私個人としては未だに、申し訳なく、そして非常に心苦し



側壁に利用された大谷石

③戦友の志

この当時の思い出として、

鹿児島県下、傘ノ原（カサンバル）飛行場不時着事故が思い出されてくる。

佐世保海軍施設部への要件で、木更津航空隊から大村航空隊に飛んだ私の搭乗した海軍機が九州関門海峡上空で暴風雨下の悪気流のため、どうしても関門上空から北部九州に入ることができず、大分・宮崎と南下して、遂に鹿児島県下鹿屋航空隊に目標を切り替えての夜間飛行中、九死に一生を得て、傘ノ原飛行場に不時着した思い出である。

現在、外資企業の経営者として、年に数回アメリカ・ヨーロッパの各国へ、また毎月日本国内を北海道から九州まで飛びまわっている昨今、ジェット機とプロペラ機の相違、航空機及び航空科学の進歩、一般科学の大いなる発達などを痛感している。

海軍三〇一〇設営隊のその後（昭和二〇年八月一日以後）の作戦行動には、八月中に侵攻連合国軍に対する、本土迎撃用の戦闘機着陸のための東京飛行場（昭和通り・市場通りの焼け跡を整備して滑走路を設営するプラン）の建設計画。さらに九月以降、信州松代の大本営築城工事に進出する計画、最終的には陸軍部と合流して、大本営守備隊が特別編制されたという、詳細なスケジュールが組みこまれていたこと・・・を知る人は少ない。

十数年前、東宝映画「日本で一番長い日」をみた。また、過日（昭和五六年八月二五日）終戦記念日に、T・Vドラマ「一死大罪を謝す」を観る機会を得た。

あの終戦前後の十日間余り、広島原爆そして八月九日か

らの終戦交渉等々の事などが、当時海軍中枢部と共に、その起居を同じくしていた私たち海軍士官には、刻々と極秘情報が流れて来ていた関係から、終戦前後の陸海軍の大混乱の場が想起されて、非常に興味深く、同時に深刻な想いをよみがえらせられたのである。

私たちの卒業の時は、サイパン陥落後であり、連合艦隊五〇〇余隻の中、残れる艦船五〇余隻という非常事態であっただけに、卒業生全員が艦船勤務を志望したが適えられなかった。

そして何時も感ずることだが、優秀な人達が戦死して、平凡な者が生き残った感が強い。日本の将来を思い、大戦に若き命を捧げた彼等戦友の志を無にしてはならない。

（生協ニュース教職員版第51号より抜粋転載）

朝日新聞
2000.8.19

横浜・日吉の旧海軍地下ごう

消えゆく戦争の遺跡

横浜市港北区箕輪町と曰くが、水たまりが多く歩きにくい。

「戦争遺跡」が眠っている。

東西三百餘、南北四百餘石で覆われていた。太平洋戦争末期にコンクリートが不足し、大谷石が代用されたという。壁の石が崩れていたり、柱が折れていたたり、素堀で、天井や壁の土

「日吉台地下壕保存の
会」の喜田美登里さん(五三)

たちと中を歩いてみた。真
っ暗で、ひんやりと涼し
い。高さや幅がともに約三
層ほどの通路が暗やみの奥
へ続いている。懐中電灯で
照らしながら進むと、迷路
のように道が分かれている
。床は舗装されている

が、水たまりが多く歩きにくい。

天井はコンクリート、壁は住宅の塀に使われる大谷

石で覆われていた。太平洋戦争末期にコンクリートが不足し、大谷石が代用されたという。壁の石が崩れていたり、柱が折れていたたり、素堀で、天井や壁の土りがむき出しのままの所もあった。

旧海軍関係者の証言や建設にかかわった技術者たちの文獻によると、一九四五年初め、旧海軍は、艦船・兵器の計画、試験、製造の専門機関だった艦政本部を東京・霞が関から移すために、地下ごうを造り始め

保存の願い、に行政の壁



た。移転予定日は八月十五部地下ごう」と呼ぶ。

日。その日に終戦を迎え、近頃の慶応大学「吉キヤ」艦政本部が入ることはなかった。ンパスの地下にも、旧海軍と関係のある地下ごうが三

同会の会員らは「艦政本」つある。

四月に同キャンパスの地下ごうで同会が実施した見学会には、二百人から問い合わせがあった。「地下ごうへの関心は高いんですよ」と喜田さん。

市防災技術課の中島徹也課長は「見学できるように

同会は十年前、地下ごうを戦争の歴史を伝える遺跡として、保存していこうと結成された。聞き取り調査や文献による研究、見学会を続けてきた。可能な限

備が必要だ。新たな負担も生じる。地下ごうの土地には個人の財産なので、市がどうにかわってあげようか」と、話

り現況のまま残し、學術調査をした上で、市民に公開することを市に要望している。

困難がつきまとう中で、戦争遺跡を保存しようとする動きは全国で広がっている。

横浜市教委が九八年、四つの地下ごうを「軍事遺跡として重要」と文化庁に報告したのも追い風だと受け止めている。

高知県南国市で十八日、戦争遺跡保存全国シンポジウムが始まった。四回目は、今年は、二十四団体が参

しかし、横浜市は「鑑政本部地下ごう」の一部を土の新井揆博さん(六六)が出席砂で埋め戻し、入り口を閉じた。

鎖する工事を今年の秋に予定している。一部で崩落の恐れがあり、内部も劣化している人が減っている中、戦争を体験した人が高

争遺跡は重要になる。文化財として位置づけて、残して置く」

存の会」の喜田美登里さん。新井さんは、シンポジウム（左）と新井揆博さん、横ムに出かける前にその話した。（菊池 竜介）

た。
(菜池 竜介)

九月四日、新井・茂呂で下記要請書を横浜市教育委員会文化財課と災害対策室に提出しました。箕輪町の艦政本部の地下壕も歴史的な文化財としての価値は高く、行政がこの遺跡の学術調査を早急に成し、その保存を積極的に推し進めることを強くお願いしてきました。近々回答があると思います。

2000年9月4日

横浜市長 高秀秀信 様

要 請 書

連合艦隊司令部日吉台地下壕の保存をすすめる会

代 表 大 西 章

事務局 横浜市港北区下田町2-1-33

喜田美登里 TEL045-562-0443

アジア太平洋戦争が終って55年を経過し、いよいよ21世紀を迎えようとしています。この間、貴重な多くの戦争遺跡が調査・研究もないままに破壊されています。

いま、あらためてあの戦争が問われているとき、その実相を伝える戦争遺跡を保存し、調査・研究をおこない、ひろく公開していくことが、ますます重要になっています。

横浜市港北区日吉町三丁目から箕輪町三丁目に連なる「日吉台海軍艦政本部地下壕」は、戦争末期にあって本土決戦に備えた海軍省の中核の一つ艦政本部が入る予定で築造されたものです。坑内には、空気筒・トロッコの軌道跡・井戸・大谷石・セメント筵・レンガなどの遺物が残存し、当時、資材がまったく枯渇していくなかで日本海軍が総力をあげて築造に取り組んだ姿を彷彿させています。

私たちは、この戦争遺跡を学術調査・研究をして、保存することによって後世に伝えるとともに二度と忌まわしい戦争を繰り返さないよう戦争の真実と平和学習の教材にしたいと考えます。この地域には、殿袋遺跡をはじめ歴史の宝庫でもあります。横浜市がこの地に「日吉の丘公園（仮称）」を造るためご努力されていることに、日吉台地下壕保存の会と致しまして敬意を表するとともに、是非とも私たちの要請にお応え下さいますようお願い申し上げます。

要 請

- 1、アジア太平洋戦末期本土決戦下に築造された「日吉台海軍艦政本部地下壕」について、公式調査団を結成して直ちに学術的調査・研究をして下さい。
- 2、「日吉台海軍艦政本部地下壕」を「史跡」に指定して保存し、戦争の真実を知るため、研究者・市民に公開して21世紀に向けて平和への研究・学習の場にして下さい。
- 3、「日吉台海軍艦政本部地下壕」の保存については、現況保存が望ましいが、住民の安全を考えて保全対策を施すとともに、入り口部分については一箇所にとどめて施錠し、必要に応じて出入りできるようにして下さい。

以 上

活動の記録

2000. 6～9

- 6/18 日吉台地下壕見学会（横浜・川崎平和のための戦争展プレイベント）43名
 6/28 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会
 7/ 4 第2回運営委員会18:00～ 会報発送16:30～ 慶應高校物理教室
 7/8～9 戦争遺跡全国ネットワーク運営委員会（南国市）
 7/10 （仮称）日吉の丘公園意見交換会（日吉台小学校）
 7/16 「戦争展」慶應日吉キャンパスピースウォークの下見 6名
 7/22～23 『2000横浜・川崎平和のための戦争展』慶應大学日吉キャンパス
 藤山記念館 参加者約300名、ピースウォーク参加者80名 NHKTV、
 ラジオ、朝日新聞、神奈川新聞で紹介された
 7/25 第3回運営委員会18:00～日吉地区センター
 8/18～20 第4回戦争遺跡保存全国シンポジウム南国大会 高知県南国市
 8/21 （仮称）日吉の丘公園意見交換会 箕輪町側の入口について（箕輪町会館）
 8/28 艦政本部地下壕の調査
 9/ 1 第4回運営委員会18:00～慶應高校物理教室
 9/ 3 日吉台地下壕見学会 230ハイキングクラブ、保土ヶ谷中学社会科部50名
 9/ 4 「日吉台海軍艦政本部地下壕」について横浜市長に要請書を提出
 9/ 9 沖縄平和ネットワーク村上有慶さんを囲む会
 9/17 艦政本部地下壕の調査 慶應大学放送研究会の取材（地下壕を案内）
 9/20 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会
 予定10/4 第5回運営委員会18:00～ 会報55号発送16:30～

本の紹介 <日吉台地下壕の堅穴抗がタイムトンネルの入口に…>

県立大清水高校の新井敦子先生から生徒さんと一緒に出された絵本を、保存の会に頂きました。現代神奈川から夢の古代琉球へ…さらに恐ろしい沖縄戦へ…。かわいいイラストのてっちゃん和ゆみちゃんのタイムスリップ、不思議体験。

沖縄修学旅行で「ガマ」に入った体験をきっかけにこの絵本を製作されたそうです。地下壕が過去への入口に、地下壕のカニが子供たちを案内します。

かながわ・メッセージ 月桃の風車（げっとうのかざぐるま）

作・絵 新井敦子 斉藤明日香 山本さやか （星雲社）1999年刊

見学会のお知らせ

日吉台地下壕見学会

11月25日（土）を予定しています

お問い合わせは喜田まで（045-562-0443）

